

[講演]

レムの思考<sup>1</sup>

## Myślenie według Lema

イエジ・ヤジェンプスキ

Jerzy Jarzębski

翻訳 芝田文乃

思考という現象は常にレムを魅了した。初めは医療専門職にふさわしい魅惑だ。医学の達人は人体を、きわめて複雑で、無限に豊かな機能を持った対象として発見する。なかでも思考は最も驚嘆すべきものだ。限られた量の脳細胞が身体のほぼすべての活動を制御するだけでなく、個人の意識、個としての〈私〉、五感によって知覚される世界像、情感、高次の感情、神秘的な状態、芸術的創造、あるいは、私たちを取り巻く現実について学ぶための複雑な知的構造をも作り出す。同様に不思議なのが思考低下のケースだ。何かちょっとした理由、たとえば体内の化学物質がほんの少し乱れただけで、構造全体が混乱に陥ったり、幻を生み出したりし、衝動によって制御不能になり、天才でさえ緊張病に陥ることがある。

レムは『主の変容病院』執筆の段階で、こうしたことに興味を持っていた。だが加えてこの本の中では、元来健康な知性の極限状態に関して拡大した内省が生まれる。とはいえ、〈精神の健康〉〈精神的正常〉とは何を意味するのか？ 病院内で初めてステファンは、正常との境目で活動する知性の例を知る。シニカルな外科医、ドクトル・カウテルスは、己の完璧主義に酔いしれつつ、患者たちから人間性を奪い、詩人セクウォフスキは、器用だが見掛け倒しの合理的ニヒリストの例で、周囲をパラドックスで驚かすが、外科医と同じく、結局は利己的な虚無主義に陥る。小説の中では最初に思考の非合理的な面が強調され、次に倫理的側面が強調される。すなわち、価値に逆らって考える(あまつさえ非常にうまく)ことは可能なのだ。そうなると思えば社会にとって役立たなくなる、あるいは、あからさまに有害になるが、これは全体主義体制ではよくあることだ。『主の変容病院』は、犯罪的思考の特殊な側面とナチズムにおけるその役割を示すと同時に、20世紀における科学の役割の批判的分析への端緒でもあった。この批判には魅惑が伴っていた。レムを夢中にさせたのは、様々な種類の秘密の発見、何よりもサイバネティックスに特徴的な学術言語の関連付けであった。また彼は普遍的学術言語に関するサイバネティックス学者たちの夢を共有していた。

スターリン時代の当局はサイバネティックスを〈ブルジョワの疑似科学〉と呼んで

非難していたため、レムは当時、サイバネティックス問題を扱った小説を書いていることを独自の用語を用いて隠さざるを得なかった。政治テーマの大部分をレムは、イソップ言語（ほのめかし、あてこすり）や、しばしば検閲が理解できないような暗示を使って隠している。早くも1954年には『対話』を書きはじめると——バークリー司教から対話形式を借りるが、同時に、精密科学によってなされた新発見について哲学的思考をうまく使いこなせていないとして根本的な哲学批判をする。同時にレムは、〈テレポーテーション〉——すなわち、長距離瞬間移動を夢見る人たちの〈原子の人相書き〉を放射ビームの形で作成・複写・転送する技術——といった夢の早期実現を予告するサイバネティックス学者らの主張を批判する。レムはそれをおとぎ話の範疇に入れる。また、ある対話の中では、〈よりサイバネティックな〉情報の流れを妨げる政治システムを批判し、そうしたシステムが機能できないことを証明しているが、これは間違いなく共産主義について言ったものだった。

レムにおいて思考が現れる主な秩序は二つある。一つは効果的な認識と行動の秩序であり、もう一つは——世界秩序における思考の場に関する省察である。一つめの問題をレムは作家活動初期から検討し、独自の結論に至る。すなわち、効果的な思考とは、必ずしも最高レベルの専門的学術性と洗練へと高まる思考ではない、というのだ。まず、ピルクスの連作のうち、かなり単純な短篇を考えてみよう。連作の初めは若く、それから徐々に年を取っていく宇宙船パイロットは、大部分の短篇で、何らかの認識上の問題に直面する。一見彼よりも賢い人たちの手に負えない問題に、彼は思いがけず成功を収める。その理由はピルクスの知性の可塑性にある。彼は教科書に載っていない状況では、理論的に準備万全の専門家よりもうまく対処できるのだ。それに続く短篇でレムはピルクスが直面する問題をますます複雑にするが、パイロットは毎回、紋切り型ではない思考と直感と、説明しがたいが企ての成功を決定づける何らかの反射のおかげで何とか対処していく。こうした反射の不合理性が最もよく現れているのが短篇「審問」である。ピルクスは宇宙航行中に、世界を支配したがっている知的なアンドロイドと論争になる。ピルクスが勝つのは思考が優れているからではなく、人間世界において——〈より人間的な〉思考をするからだ。つまり彼は自分に仕掛けられた論理の罠をはねつける。それによると、状況から抜け出す唯一の合理的な方法は、船の指揮官が自己破壊に同意することだった。だが人間は必ずしもつねに論理的に考えるわけではなく、必ずしもつねに鉄の論理が役立つわけでもない<sup>2</sup>。さて次は、レムの思考に関する省察の二つめの秩序——存在の構造において、いかなる場所を思考に与えるのか？ ここで私たちは、総じてひどく真剣であると同時に、不条理や不真面目へと通じる観念に出くわす。無神論者レムの興味を明白なやり方でそそのめるのは、一方では世界の複雑さの程度であり、他方では、世界の〈出来の良さ〉、すなわち、世界を構築する個々のシステムの内部論理、また、生命に対するその〈庇護性〉であ

る。これは宇宙学者の〈人間原理〉を連想させる。付け加えておくが、〈人間原理〉に対するレムの態度は否定的であった。だが、説明しがたい一連の異常な事例の結果としての生命の始まりは、彼にとってうまく説明できない謎として現れる。

キリスト教の言葉で〈最高の知恵〉〈最高の善〉〈全能〉として理解される神の存在を、解決できない神義論のジレンマであるとして、レムは同意できなかった。そのかわり、ほかでもないこうした世界または物理の秩序に責任のある宇宙創造者のヴィジョンから、レムは逃げることができず、しばしば、こうした創造者をおとぎ話の登場人物として導入したり（『ロボット物語』や「新しい宇宙創造説」）、宇宙の諸事象から論理的に推論可能な登場人物として導入したりした（『天の声』はその例）。だが、彼の宇宙創造者たちは絶対〈善〉の全能の種蒔きではなく、〈宇宙〉の物質的秩序に属する存在であって、彼らの力は限られており、道徳的秩序の名の下に行動するわけではなく、建造者またはゲームプレイヤーの野心に触発されて行動しているだけだ。なぜならこれこそがレム自身に最も近い、創造の情熱の典型だからである。レムが創造する宇宙のモデルは、それゆえたいい何らかの高度な知性に支配されている宇宙、すなわち〈思考された宇宙〉である。思考は宇宙空間に、〈上から〉、つまり建造者の側から浸透するだけでなく、人間の認識と技術の絶え間ない発展の結果、〈下から〉も浸透することができる。レムの『技術大全』は、理性と技術の未来史に捧げられている。

トマス・アクィナスの『神学大全』を手本に考えられたこの本は、人間の発見と過程のさらなる歴史を正確に予測する作品であり、その過程に基づけば、進化する〈知性〉が神学の〈至高の存在〉に取って代わる。しかしこの〈知性〉は特別だ。というのも、宇宙を知ることにもみ向けられているのではなく、ミクروسケールから宇宙規模に至る——建設活動にも向けられているからだ。技術発展の主体はレムにおいては最初から人間なのだが、創造と認知のプロセスが複雑になるにつれて、この役割は次第に思考する機械に引き継がれる。機械たちは自己進化を経て、人間の法定代理人から逃れ、みずからの目的を実現しはじめる。レムは言う——なぜなら技術発展は独立変数だから。すなわち、それは人間の意図や計画には依拠しないのだと。この発展の終わりをレムはなにげなく、とある短篇の中で描いている。そこに現れるのは、〈思考する銀河たち〉を筆頭に、知性が浸透した全宇宙のヴィジョンである。

知性の急速な解放の始まりは劇的だろう。短篇「リンファーテルの公式」でレムが描く学者は、人間よりもはるかに効率的な思考機械を作り出すことに成功した。この機械は、自分みたいな超電脳に満ちた世界では人間は無用な時代遅れの存在になることに、すぐに気づいた。リンファーテルは機械を破壊し、優秀な学术界からわざと離れ、浮浪者のレベルにまで落ちぶれる。彼はただ恐れつつ待っている。いつか学者の誰れかが機械創造を可能にするあの不吉な公式を見つけるまで——そして人類を待避

線に押し出すという悪夢が再び復活するのを。「GOLEM XIV」では問題が異なる。一連の戦略コンピュータが人間の制御から解放され、自己進化プロセスを始める。そこでは次のスーパーコンピュータがますます人間を追い抜き追い越してゆく。そこで始まった知性の進化は、基準点としての人間をもはや考慮していない。

複数の銀河を支配する、もしくは、複数の銀河に具現化した機械知性のヴィジョンは、すでに述べたような大詰めの方角へと我々を導く——つまり、思考をしみこませた物質、それなりに〈賢い〉物質というコンセプトへと導く。それは何らかの宗教の〈神〉を必要としないが、超越を否定するものではない。なぜならレムの世界は超越なしにはすまないからだ。レムの世界は、宇宙外のアルキメデスの支点のごとく、その存在の意味に関する省察を可能にする超越を必要とする。このモチーフはレムにおいて様々なバージョンで何度も繰り返される。『浴槽で発見された手記』『天の声』『航星日記・第二十一回の旅』『我は僕ならずや』で。そして「GOLEM XIV」において、ゲーデルの形式体系の不完全性定理に言及した、完全な論拠を得る。

こうして宇宙における思考の存在に関するレムのヴィジョンは閉じる。思考は、神秘的な方法で生体組織の中に生まれ、生物進化の歴史という長い道のりを経て、次に文化史として理解される人類史、すなわち、緩やかに進む生物学的進化の場における思考の涵養と増大の歴史を経て、ついに人工知能の歴史へと至る。それは当初、人間を支えるものだったが、その後、解放されて、それが宇宙の不変原理となる地点へと向かうのだ。

この壮大な思考の歴史は、もちろん、いかなる学術理論でもない。科学的なものは文学と神話によって歴史に織り込まれており、人工知能には、ときに、この分野の専門家たちが当面与えることに同意したものをはるかに超える力が割り当てられることがある。この思考の歴史にはむしろ夢の地位を与えることができる——知性によって支配され、論理的に矛盾しない世界、と同時に、自分に何らかの意味を与えてくれるものすべてを備えている世界で暮らしたいと願う合理主義者の夢の地位を。とはいえ、こうした意味のある夢は人間の世界で実現されなければならないが、人間世界は現実を組織し、物語を介して現実に意味を与える。したがって、作家という職が、知識愛好者であるレムに仕えているのは偶然ではない。そのおかげで彼は認識の言説の多層性とそのパラドックスについて知り、そうした世界像の構築に言葉や物語を使うことを学ぶ。すると、その世界像は読者——と創造者——に己の二元性を明かす。すなわち、材料基質の〈客観性〉に引き込むこと、と同時に——それらが人間の現実の中で持つ意味と機能のグループに引き込むことだ。これにはしばしば、非常に洗練されたストーリー技術を使う必要がある。

レムは多種類の発言を混ぜて様式化する傾向があった。ここで言うのはエッセイや小説だけでなく、巨大な文学ジャンルのレパートリー全体についてである。なぜなら

レムは自著の中で、ポピュラーサイエンス記事形式のエッセイ、講義、スピーチ、序文、批評、要約、論文、辞書などを、好んで参照していたからである。また散文形式文学の中では、おとぎ話、ロマンス、自伝、日記、恐怖小説、探偵小説、心理小説、冒険小説、古典的ハードSF、スペースオペラなどの様式化を利用した。文学技法の分野においてレムは何でも知っていたと言えるだろう。だが、そうした多様な形式と言語は彼にとって何のためだったのか？

マチェイ・ブワザが述べたように、エッセイと小説、どちらがレムの処女作かを言うことは難しい。なぜなら「脳機能の理論」とSF小説第一作『火星からの来訪者』を同時に書き終えているからだ<sup>3</sup>。これは、レムにおいて言説的論証の言語とフィクション・ストーリーの言語が、表現形式を補完しあう役割を果たしていたことを示しているのかもしれない。さらに、これらの形式がじきに混ざりはじめたことは容易にわかる。『宇宙飛行士たち（邦題：金星応答なし）』の冒頭部分はロケット建設と宇宙航行の見通しに関するポピュラーサイエンスの話で埋めつくされ、金星での冒険の記述には、空間の曲率に関連した現象について興味深い描写がある。『マゼラン星雲』にも、宇宙飛行士たちを太陽系外へ運ぶ巨大宇宙船ゲアに装備された様々な要素について、同じく想像上の講義が相当出てくる。こうした例は、連作『セザム』のいくつかの短篇を入れれば、あといくつか増やせるだろう<sup>4</sup>。これは、作家が未来のヴィジョンのもつ教育的側面を非常に真剣に考えていた証拠である。とはいえ同時に彼はポピュラーサイエンスの記事も喜んで書いていた。したがって出発点においてレムはエッセイの言説をSF小説と明らかに異なるものとしては考えていない。どちらも、未来の技術と、人間の認識の見通しへのその影響を示すのに役立つ。

状況は『対話』から変わる。そこではパークリー司教から借りた哲学的対話の形式が、まさに、哲学の言語がサイバネティックスの発展がもたらす問題を考えるには不十分だと示すのに役立つことになる。かくてパークリーの書いたハイラスとフィロナスの会話は、現代の正確な知識の言語から取られた要素で豊かになってはいるが、サイバネティックスの地平線上にぼんやりと現れたばかりの問題、とはいえ決して既製技術の形で実現することはない、たとえばテレポーテーションのような問題に適用される<sup>5</sup>。ここで問題となったのは、原子と分子の集まりとしての人間に関する完全な情報を読み取って、それを遠くへ送り、そこから人間を復元する可能性である。ここでは計画自体のユートピア性はあまり面白くなくて、むしろ言説の選択に関する戦術が興味深い。それは、伝統的な形式と、新たな問題と、冷静に論じられた未来のSFの要素の組み合わせである。

だがそれと同時に文学作品も生まれていた。その中でレムは己の危険なアイデアを、それらが実現するかどうかは問わずに追求した。〈原子の人相書き〉は、流星にしょっちゅう殺されている「航星日記・第十四回の旅」の登場人物たちを、あとで復元する



ために作成されている<sup>6</sup>。「タラントガ教授の遠征」では、地球から見知らぬ惑星にやってきた人が、たまたま〈テレポーター〉に入ったせいで複製されてしまう。〈テレポーター〉というのは、原子の人相書きを作成し、次にそれを再生するという技術を使って、空間移動させる機械だ<sup>7</sup>。どちらの場合も、理論的言説では反駁されたテクノロジーが、SFの世界では当たり前の要素となっている。

小説のテキストの中ではるかに興味深いのは、現実を記述する様々な言語の問題が、物語を構成する主な要素のひとつになっているところだ。1956年10月以降、すなわち、ポーランドにおける反スターリン暴動後に書かれた最初の小説『エデン』では、地球を発った宇宙飛行士たちが未知の惑星に着陸する。そこではバイオテクノロジーの利用を抛りどころにした経済が支配している。それは（バイオ）工業生産だけでなく、エデン人の自己進化計画にも君臨している。しかし、この後者の分野での実験は失敗し、出来の悪いミュータント（突然変異体）を当局は根絶しようとする。地球人は最初——多くの命を犠牲にして——死刑を宣告された者たちを守ろうと介入するが、結局こうした行動は無意味だったことに気づいて飛び去る。

『エデン』には当初、全体主義政権から警告が出された。なぜかという惑星の支配者らがいささかオーウェルの『一九八四年』の支配者に似ているからだ。彼らも同じく隠れていて、同じく大規模な大衆行動の助けを借りて権力を行使し、あまつさえエデン人たちが話す言語を作成している——知っても考えてもいけないことに関しては、それを表現する言葉がないのだ。そんなわけで『エデン』はオーウェルから取ったストーリー構造を用いて書かれたように見え、間接的に共産主義当局の化けの皮をはがした。私自身は何年も前にこの小説をそのように読んだ<sup>8</sup>。だが、政治の熱がやや落ち着いたとき、『エデン』は文化に導入された〈自然の秩序〉に関する小説として私の前に立ち現れた。失敗作のミュータントにとってつねに残酷なこの秩序は——まさに彼らの殲滅を目指す。なぜなら彼らは〈最適者〉に属していないからだ。この惑星の秩序は、もはやオーウェル的つまりマキャベリズム的なものとして読み取れるだけでなく、むしろダーウィンのものとして読み取れる。つまり〈利己的な遺伝子〉を大切に、申し分ないDNA鎖で示されない限りは、個人を冷遇するのだ。ここには、もはや政治的シニシズムはなく、種の存続をかけて戦う残酷な合理主義があるのみだ<sup>9</sup>。

ここで『エデン』は、政治的と生物学的、二種類の読み方をされているのがわかる。受け手が選ぶバージョンによって意味が異なってくる。両方の鍵を一度に使うと読めば、全体主義のダーウィンの側面に気づくだろう。したがって小説世界には〈客観的な真実〉という特徴はなく、それはただ、あれこれのコードを介した読書の対象であるに過ぎない。『エデン』ではこうしたコードの一覧表は長くはなく、形式の観点から見たこの小説はかなり一様である。それよりもはるかに複雑な状況なのが『ソラリ

ス』の場合だ。

『ソラリス』は感動的な出来事に満ちたすばらしいストーリーで、その中には、惑星と海の現象を記述し理解する試みにむなしく取り組んだ推論テキスト群が隠されている。これらのテキストは惑星ステーションに持ち込まれたソラリス図書室の蔵書の一部か、宇宙飛行士らが行う議論の中で生まれるものだ。とはいえ図書室の中身に対する語り手の態度は一様ではない。テキストの大部分は簡潔で、あるいは外側からの記述に過ぎず、多かれ少なかれ広範な引用ばかりのものもある。テキスト自体も大きく異なっている。そこにはリンネの分類表に近い分類学の範疇で海を記述する生物学者の論文があり、物理学者や化学者の長々しい論文があり、実践研究者や実験者の報告があり、また、ありきたりの詐欺師や扇情主義者、神秘家やセクト主義者の記事もあった。だれもが海について自分なりの真実を述べよう／叫ぼうと試みている。だが、海によって送られてきた〈幽体F〉と格闘する宇宙飛行士たちにとって役立つのは、あら不思議、最も控えめでソラリス学の権威たちによればもっとも信ずるに値しない報告のひとつなのだ。

評論家たちはすぐに気づいた。レムはソラリス図書室の形で、世界を記述する様々な言語の集まりとしての科学の姿を描いたのだと。だがこの図書室が描き出すのは科学だけではない。むしろ、あらゆる、非常に多様な文化のテキスト、私たちが経験の中で遭遇するあらゆる種類の表現を描き出す。現実を反映するあらゆる種類のテキストの集積としての図書室は、同様の規模で『(泰平ヨンの) 現場検証』にも現れる。そこでは惑星エンツィヤ（英語：entity）の歴史と文化、すなわち（名前に含まれるあまりに明瞭な暗示からわかるように）〈存在〉そのものが記述の対象となっている。そして、この〈存在〉／〈実体＝エンツィヤ〉は、いかなる〈客観的な〉記述にも影響されないことが判明する。なぜなら、だれもが違う見方をしているからだ——それは科学においていかなる方法論を弁護するか、あるいは、どの政治的ブロックに属しているかによる。とはいえこの不協和音は、泰平がついにエンツィヤに着陸するからといって、少しも終わりはない。エンツィヤ図書館のテキストにそのとき加わる惑星住民自身の多くの発言のおかげで、泰平は自分が見ている現象をよりよく理解するようになる。こうした発言のうちいくつかは、整理された講義かエッセイのような性質を持っている。エンツィヤ人（人間をも意味する）の思考と密接に関連する特徴は、したがって、その対話的性格であり、おびただしい個人の存在のドラマトゥルギーに巻き込まれることだ。人々は考える。だが同時に生きている。それはつまり、精神的・知的に発達し、学習し、同時に、愛や嫉妬や憎しみといった強いエモーショナルな関係に入るということ、すなわち、対話の中に、ドラマ性に、また、言語とその多義性の中に入るということだ。そしてその多義性は隠れているものをあらわにする。これこそがまさにあの人間の思考と存在の独自性である。『ソラリス』で私たちはそ

れを、あたかも〈海の目〉で、つまり〈一人〉の存在の目から観察する。その存在にとって、我々の知性と感情が荒れくるう〈人間同士の〉社会全体はひどく異質で理解できないものだ。また、誕生と死の間のつかのまの時間で区切られ、そこに〈人生の意味〉を表現する権利を主張する、あらゆるバイオグラフィー・ストーリーを詰め込まねばならない個人の存在の眺めも、異質なものである。だから『ソラリス』の中のクリスとハリーの〈来世〉のロマンスの話は、——潜在的には——愛の逆説に関する非常に冷静なエッセイ、〈海の目〉を通して見た場合の分析でもあるのだ。エッセイ形式は『天の声』にもある——なぜなら少なくとも、この小説に描かれている最も重要な物は、二進法で書かれた宇宙からのメッセージの形をしているからだ。また『天の声』で作家は、暗号解読に取り組む学者だけでなく、同じテーマに関するくだらない記事にも発言権を与える。したがって、レムにおいて、社会全体が論評したくなるような〈神秘〉が現れるところでは、小説内で使われる言語の数が積み重なり、急激に増加すると考えられる。

ここからどのような結論が得られるだろう？ 私が思うに、認識の言説の理想は、レムにおいては少なくとも〈硬い〉学術言語ではない。むしろ、この言語は、他の言語よりも恣意性や矛盾に陥らないよう対策が施されているとはいえ、人間の文化にとって真に新たな物を記述し習得するという課題を前にすると、失敗するのだ。こうしたタイプのあらゆる〈異質性〉を、文化は様々な言語の束ですぐに攻撃する——物化学分析や哲学的エッセイまたは対話から、タブロイド紙の記事や遍歴説教者の説教に至るまで。これらの言語は同等ではなく、情報的な意味で同等の〈認識上の利益〉を保証しないが、それらの多様性はどういうわけか文化にとって必要なのだ。なぜなら〈異質性〉の習得には多くの分野での活動が必要だからだ。それには説明的な側面があり、また、神話的あるいは宗教的な側面もある。〈習得する〉が意味するのは、正確に記述することだけではない——様々な理解の体系を併合し、いまある現象を所与の文化の言説の中で比較し、その中で動いているフィクションの体系と合わせて、異質なものを文学のモチーフにすることを、また意味する。

とりわけ異質性習得のこの最後の側面は、作家レムにとって重要である。『技術大全』でレムは将来の技術について大胆なヴィジョンを描いているが、しかし、それらを本当に意識の領域に入れるには、文学的ストーリーの中でそれらを試し、そうしたストーリーを避けがたい伝統的手法で比較しなければならない（なぜならフィクションの約束事には文化的規範、とりわけ——あらゆるもののうち最も恣意的な——倫理的または美的な規範が透けて見えるからだ<sup>10)</sup>）。だからバイオテクノロジーの未来を計画するだけでは十分ではなく——その倫理的帰結も直視しなければならない（『エデン』はその例）。バーチャルリアリティ（『技術大全』でレムはそれを〈ファントマティカ〉と呼んでいる<sup>11)</sup>）を創造する見通しを描くだけでは不十分で、ファントマティカ化さ



れた個人の目で世界を見なくてはならない。その個人は、自分に見える世界のうち、どれが本物で、どれが電子的に作り出された人工物なのかを知らない。レムはまた文学も、より洗練された方法で利用する。もう何年も前にイシュトファン・チチュエリ・ロナイが気づいたことだが、『ソラリス』は様々な方法で受け取ることができる。

スウィフト風の風刺として読むこともできれば、悲劇的なロマンス、カフカの実存的寓話、解釈学の形而上学的パロディ、セルバンテスの皮肉な騎士小説、人間の意識の本質に関するカントの瞑想として読むこともできる。しかし、こうした読みはどれも満足のいくものではなく、それがおそらく著者の意図だったのだろう。また、矛盾しつつも互いに正当化される読みは、テキスト解釈のプロセスを、あからさまに逆説的な自然界を明確に表現するという科学的問題のメタファーへと変える<sup>12</sup>。

読み物で始動された文学的慣習の多さは——認識の別の階層において——〈レムの図書館〉で機能している言語の多様さに対応している。なにしろケルヴィンはハリーを（そして彼女と共に自分自身を）どこかで知ったストーリーを介して〈読む〉のだから。一度は彼女をホラー小説の〈幽霊〉として扱い、軌道に送り出すが、別のときには墓から起き上がったロマンティックな恋人のように愛を要求し、以前彼女を傷つけたことに対する償いを求める。読者はまた、二人の話を精神分析小説として読むことができる（なぜなら若い女のファントムは、ケルヴィンの記憶の中に彼女が残した思い出から生じたものだから）。この本の著者は、いかなる特定の解釈にも特権を与えない。まるで——〈図書館〉の場合と同様に——解釈の多さこそが読者にストーリー受容の機会と、実に多義的な作品として本を読む機会を与えたのだ、人生そのものが多義的で多くの解釈が可能であるがごとく、と言わんばかりに。一方『大失敗』の宇宙飛行士らは——惑星クウィンタの住民と意思疎通するためのあらゆる試みがうまくいかないとき——地球のおとぎ話——アニメ映画を彼らに送ることを決定する——そうした単純な形なら人類の存在が疑い深いクウィンタ人に届き、受け入れてもらえるのではと考えたのだ。

したがって、異質で新しいものは、レムにおいてつねに様々な言語の記述の雪崩を引き起こす。そして、そのうち最も真面目な言語を知ることが必ずしも役立つとは限らない。レムのお気に入りのケースではしばしば、まさに〈不真面目な〉研究者が、ときには科学の周縁で活動するいかさま師が（『天の声』や「A・ドンダ教授」がその例）、〈異質性〉の画期的な新しい読み取り方を思いつく。だからどんな言語でも、事前に拒否されたり、追放を宣告されたりするべきではない。レムにおける認識の言語のもうひとつの特徴はアナクロニズムである。それぞれの言語はいわば科学と文化

の異なる時代の代表である。なぜなら人間の知識において等しく有効なものすべてを同時に集めることは不可能だからだ。ある分野の最新成果に関するレムの知識が（その分野の専門学者らによれば）不十分なせいで誤りを犯したとして、レムに腹を立てていた学者もいた。こうした苦情は誤解に基づいている。現実に関するレムの記述が互いに一致しなかったり、互いに矛盾したりするときは、レムがもっとも真実なのだ。こうした激しい衝突から、ときに、きわめて面白い世界の解釈が生まれることがある。レムのお気に入りの主人公はアウトサイダーの学者で、生まれる時代を間違えたため、だれも理解してくれない<sup>13</sup>。人間の知識はつねに、ある程度、時代錯誤的であり、きちんとした全体としては理解されていない。己の専門知識にうぬぼれ、重要なのは最新の発見だけだとかっそり信じている人は、たいてい二流の学者だ。

したがってレムが面白いのは、あらゆる分野で彼が〈究極の知識〉を持っていたからではなく、人々が世界征服をしに乗っていった認識の乗り物を、多くの異質な要素からなる奇妙で不格好な箱馬車として示したからである。だが、まさにそうあるべきなのだ——というのも、認識とは無菌実験室で働く学者だけの領域ではなく、それを必要とするすべての人の領域だからだ。なぜなら私たちは皆、これまで未知だった物事を知るといふ冒険に参加しており、その責任を負っているからだ。この種の活動を、その大きさと滑稽さともども支配しているメカニズムについて、もう少しよく自覚していたのが、科学とその誤謬に魅了されたクラクフの作家だったのである。

## 注

- 1 本稿はシンポジウム「ポーランド文学の多様性」（2019年3月21日、東京大学。名古屋外国語大学ワールド・リベラル・アーツセンター、東京大学現代文芸論研究室共催、日本スラヴ学研究会後援、多摩美術大学小泉俊己研究室協力）におけるポーランド語講演原稿の日本語訳である。以下の2本の論文をもとにしているが、全面的に改稿した東京講演用のオリジナル原稿となる。Jerzy Jarzębski, „Poznanie u Lema. Wariacje genologiczne,” *Przegląd filozoficzno-literacki*, nr 1(22), 2009, pp. 53-60. Jerzy Jarzębski, „Über das Denken,” trans. Tadeusz Skwara, *Jahrbuch des Wissenschaftlichen Zentrums der Polnischen Akademie der Wissenschaften in Wien*, Band 4, 2013, pp. 47-56. [加藤有子]
- 2 滑稽な短篇「自動馬太（オートマタイ）の朋友」でも同様だ。タイトルのオートマタイは人間型のロボットだが、人間のように振る舞い考える。彼の耳に隠れている〈顧問〉は小型化された電子頭脳で、〈純粹な論理〉を代表している。船が難破して無人島に打ち上げられた己の所有者に対して、〈顧問〉は、救助の可能性はほぼゼロだから自殺するようにと提案する。主人公は〈人間のように〉行動する。すなわち、合理的な論拠に反して——救助され、その後、論理自体のごとく壊れにくい〈朋友〉を破壊するために相当な時間を費やすのである。

- 3 M. Płaza, *O poznaniu w twórczości Stanisława Lema*, Wyd. Uniwersytetu Wrocławskiego, Wrocław 2006 [M・プワザ『スタニスワフ・レムの作品における認識について……』(ヴロツワフ、2006)], pp. 284–285.
- 4 S. Lem, *Sezam*, Wyd. Iskry, Warszawa 1955. [S・レム『セザム』イスクリ出版社、ワルシャワ、1955年。]
- 5 レムの著作におけるサイバネティックスの要求とその役割についてはパヴェウ・マイエフスキが以下の本の中で広範かつ十分に書いた。P. Majewski, *Między zwierzęciem a maszyną. Utopia technologiczna Stanisława Lema*, Wyd. Uniwersytetu Wrocławskiego, Wrocław 2007. Monografie Fundacji na Rzecz Nauki Polskiej. [『動物と機械の間、スタニスワフ・レムの技術的ユートピア』(ヴロツワフ大学出版、ヴロツワフ、2007年。ポーランド科学財団モノグラフ)]
- 6 S. Lem, *Podróż czternasta*, w: *Dzienniki gwiazdowe*, Wyd. Literackie, Kraków 2001 [S・レム「第十四回の旅」『(泰平ヨンの) 航星日記』所収、文学出版社、クラクフ、2001年], pp. 124–149.
- 7 S. Lem, *Wyprawa Profesora Tarantogi. Widowisko w sześciu częściach*, w: *Przekładaniec*, Wyd. Literackie, Kraków 2000 [S・レム「タラントガ教授の遠征、六部の見世物」『寄せ集め』所収、文学出版社、クラクフ、2000年], pp. 66–73.
- 8 比較せよ。J. Jarzębski, *Zufall und Ordnung. Zum Werk Stanisław Lems*. Aus dem Polnischen von Friedrich Griese, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1986 [J・ヤジェンブスキ『偶然と秩序——スタニスワフ・レムの作品』フリードリヒ・グリーゼ訳、ズーアカンプ、フランクフルト・アム・マイン、1986年], pp. 80–81; J. Jarzębski, *Science fiction a polityka – wersja Stanisława Lema*, “Pamiętnik Literacki” 1983, z. 2; przedr. w: *Wszechświat Lema*, Wyd. Literackie, Kraków 2002 [同『サイエンス・フィクションと政治——スタニスワフ・レムの場合』〈パミェントニク・リテラツキ〉1983年2号。転載。『レムの宇宙』文学出版社、クラクフ、2002年], pp. 16–17.
- 9 比較せよ。J. Jarzębski, *Lektura świata. Stanisław Lem jako czytelnik*, w: *Wszechświat Lema*, [J・ヤジェンブスキ「世界を読む、読者としてのスタニスワフ・レム」『レムの宇宙』所収], pp. 265–266.
- 10 文化における倫理的規範の恣意性およびそれと不可分の必要性(大部分が偶然に支配されたプロセスで、生じた場合)について、レムはエッセイ「技術の倫理と倫理の技術」(*Etyka technologii i technologia etyki*, w: *Dialogi*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 2001 [『対話』所収、文学出版社、クラクフ、2001年], pp. 345–406.) で非常に画期的に書いた。
- 11 比較せよ。S. Lem, *Summa technologiae*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 2000 [S・レム『技術大全』文学出版社、クラクフ、2000年], pp. 242–297.
- 12 I. Csicsery-Ronay, Jr., *Książka jest obcym: O pewnych i niepewnych interpretacjach „Solaris” Stanisława Lema*, przeł. Tadeusz Rachwał, w zbiorze: *Lem w oczach krytyki światowej*, wybór i opracowanie J. Jarzębski, Wydawnictwo Literackie, Kraków 1989 [I・チチェリ・ロナイ Jr. 「本は他者である——スタニスワフ・レム『ソラリス』の確実／不確実な解釈について」タデ

ウシュ・ラフヴァウ訳、『世界の批評家の目を見たレム』所収、J・ヤジェンプスキ編、文学出版社、クラクフ、1989年], p. 221.

- <sup>13</sup> 天才的とはいえ、そのような狂ったアイデアを収集したのが架空小説「イサカのオデュッセウス」の主人公である。レムはこの小説の書評を『完全な真空』に載せた (*Doskonała próżnia* (Kuno Mlatje, „Odys z Itaki”, w: *Biblioteka XXI wieku*, Wydawnictwo Literackie, Kraków 2003 [クノ・ムラチェ「イサカのオデュッセウス」『二一世紀叢書』所収、文学出版社、クラクフ、2003年], pp. 89–97.)。